会員のひろば

俳壇

小夜時雨

藤盛詔子

向き向きに思ひあるごと黄水仙
石蕗の黄に午後の日ざしの静かなる
千の風花のたよりを運び来る
ふと止まる日記書く手や小夜時雨
二ケ領水の源たどる桜狩

啓蟄

竹村清繁

水底の泥のゑくぼも春隣
啓蟄の土こぼしゆく猫車
纜の張りては弛む鰆東風
大仏の膝の陽炎立つ日かな
菜の花の夕べふはりと眠くなる

雑詠（春・夏）

内山昇

雑草にまぎれ咲きけり菫草
春泥を跳びし子供の得意顔
一望に光る航跡余寒なほ
庭先の動かぬ蟇の面構
行商の荷に三つ四つの釣忍

俳歴研よこはま

奈良春景

竹内章二

僧列の足取り軽し古都の春
春寒の御堂に声明こだまして
南大門春光を浴び群れる鹿
若草や夢多き日々遥かなり
花吹雪諸行無常の諭しかな

春

髙島治

しら梅や万葉文化令和なる
ポンペイの壁画のエロス春惜しむ
胡麻味噌に蕗も絡みて半殺し
青麦の強さの欲しき余生かな
日本丸立夏を告げる帆のしなり

歴史散歩にて

谷川操一

緩やかにしんがりを行く小春かな
朝寒へ一歩踏み出す八ヶ岳
法話聴く下座の席の隙間風
薄氷の蹄が踏みて行きし跡
花冷えや午後の紅茶と鳩サブレ

こはま壇

高野賢彦

八ヶ岳北杜の森の老人は趣味多くして詩歌を好む
老人は海軍特攻を志し今九十にして余暇を楽しむ
奥方もともに歩んで詩集をばわれに贈りて戸惑いにけり
遥かなる甲斐駒の色ブルーにて昔の姿いまも変わらじ
春蘭は遠き山から移されて春待つ人の思いを満たす
キツネ棲むあの山里は幼き日友と遊んでマツタケを刈る
梅の花　紅と白とが競いしも人は清らな白を好むか

市川康夫

「いい往生としに不足はない」といふ齢になりけりひとの言ひける
歴研の十年先を見据ゑつつおうなとおきなの宴に出でぬ
やまひ癒ゆる珍しき世に生まれきてはからずもなほ八十路にまよふ
暗闇のショーをしにつるうら若きをみなかなしも浅草は昼

老年の荷風を思ふ

ギターの音みごとに弾くは若き友アルハンブラの昔へさそふ
あせにしかビキニ環礁実験に被爆し帰る漁船ありけり
太陽がいっぱい沖は波たかし殺人者載せヨット帰投す

Musique de Nino Rotta

歌歴研よ

竹村紘一

田原坂激しく荒ぶ雨風は薩摩隼人の血涙と知れ
敵味方命惜しまぬ激戦に越すのは難き田原坂かな
両軍の弾がぶつかる激しさよかちあい弾の凄まじきかな
剽悍な薩摩隼人に立ち向かう同じ薩摩の嗚呼抜刀隊
戊辰では同じ夢見し友なれど田原思えば草木も泣ける
薩軍の新政厚徳旗印第二維新の理想は高し
国が為有司専制許すまじ雪踏み分けて出でし鹿児島

詩壇

歴研よこはま

青い悲しみ

丹下重明

おどけたピッチカートが
ボンと終ると
それは突然あらわれる

青い青い悲しみ—
うれいの雲を覆って
それは限りなくひろがる
ときに強くときに激しく

シンプルシンフォニー
第3楽章「感傷的なサラバンド」

やがて癒しの時
うれいの雲を融かし
ひろがる和みのひかり
ひと時の安息

だが再びの青の悲しみ
さらに強く激しく続く

そして終息の時
青の悲しみは静かにうすれ
いつかため息となって漂う

弦楽合奏「イギリス室内管弦楽団」
ベンジャミン・ブリテンの指揮